※
暫定表紙です
この表紙がダウンロードできるのは
別作の本編完成までの間だけです

pic©amane

ツキモノ -白-
序

Studio ***46

目次

ツキモノ-白-　序
⊠序：あなたを選んだ理由 3
. 8
オマケ：わたしのお父さん 12
-INFOMATION- 21

ツキモノ-白-　序

⊠序：あなたを選んだ理由

子供の頃から隠し続け、人生に影を落とす秘密がある時、それを見抜いた人に惚れるのはヘンな話だろうか。

茨月瀞(しづきせい)はその秘密のため一人で都会に出た。高校の間にバイトした貯金で一年目の専門学校費用は賄えたが、独り暮らしと来年の学費のためには胡散臭いバイトでも手を染めなければやっていけない。そうして見習いを始めたのが「ツキモノ」という派遣バイトで、何でも新月から満月まで二週間単位で一つの依頼をこなす便利屋稼業とのことだった。

元は現在、節約のために居候している家の者から紹介された仕事だ。

「……え？　烙鍍(らくと)さんの代わりにおれが行くんですか？　今日だけ？」

「うん、向こうにはもう、俺は遅刻するって話してあるから。着くまで相手ヨロシク、見習いクン」

ビジュアル系のような銀髪チャラ男の烙鍍が、そう言って堂々と昼寝を始めた時には叩(はた)き倒したくなった。瀞が見習い――研修中であるのをいいことに、仕事を押し付けてさぼる意図しか見えない。

それでも居候の瀞は肩身が狭い。しかも烙鍍は瀞にできたばかりの彼女、棯文漓(うつぎカザリ)の双子の兄なので、あまり揉め事を起こしたくなかった。

六月に入ったばかりの郊外は蒸し暑い。烙鍍に言われた公園に向かいながら仕事内容の紙を見ていると、感想は一言だった。

「男性に限定、平日二週間、セールスレディの付添い。これで五万……土日を除いたら一日五千円、格安ママ活って感じだよな」

依頼者の車に乗り、何をするでもなく助手席にいればいいらしい。大体仕事の愚痴をきいたり駐禁をとられないよう見張っている、と烙鍍は言っていた。

この「ツキモノ」の仕事は、色んな依頼者が多様な注文を一口五万以上の条件で出してくる。内容によっては二週間で五十万の値がついたこともあるらしい。

仕事の条件を見て選ぶのはバイトの自由で、それが瀞には重要だ。そうして依頼者と担当者共に了承の上で二週間を過ごす。その結果どうしても依頼者が満足できない場合、更新・再依頼しないのを条件に費用は免除される。だから担当者も依頼者を満足させるよう仕事をしなければいけない。

烙鍍が今回頼んできたのは完全な常連らしい。それでも瀞の派遣に気を悪くしないとは限らない。依頼者の車が待つ公園の駐車場に入った所で、遠目に相手を発見した。
気難しい眼鏡で短い黒髪の女性が、指定された白いコンパクトカーの運転席にいた。飾り気のないスーツ姿を一目見て、よし、下手に出ようと決めた。
ホストまがいのバイト歴もある瀞は、若いわりには苦労している。相手を見て態度を変えるくらい当然のことだ。この常連客は堅実、というよりケチそうで、神経質っぽく見えた。
車の横に立って、依頼書を見せながら笑顔で軽く窓を叩くと、助手席に行くように無言で指を差された。無愛想なところが文漓みたいだ、と一瞬思った瀞だった。

発進した車の中でまず烙鍍の遅刻を謝ったが、依頼者はぶすっとしたまま、前だけを見て運転していた。最低限しか効いていない冷房の中、空気がひたすら冷たかった。
「あ、あの……おれも明来(あき)さんってお呼びしてもいいですかね……？」
「……」
金井(かねい)明来。名前の漢字が何となく気に入った。明来は一瞬横目で瀞を見て、無表情のまま頷いていた。
怒って当然だよな、と瀞は思う。ママ活としては格安であろうが、二週間の依頼で五万を支払うのだ。１Ｒ家賃並みの額を毎月出すほど、お金を稼ぐことは大変だろう。
素直にそう思ったので、瀞は本当に他意なくそれを口に出しただけだった。
「いやあ、烙鍍がすみません、高いお金もらって仕事してるのに……」
沈黙が少し辛かっただけだ。だからまさか、この程度の挨拶が明来の逆鱗に触れるとは、思ってもみない瀞なのだった。

明来がぴくりと眉をひそめ、前を見たまま初めて声を出した。
「高い？」
アナウンサーのようによく通る声だ。しかしそこには愛想の一かけらもなく、更には坦々と激しい内容が続いた。
「浪費だって言いたいんですか。ホストに貢ぐよりどれだけ安いと思いますか。一日五千円で彼のように優しくブスの相手をしてくれるイケメンが何処にいるというんですか」
「……は？」
瀞の背筋に冷感が突き刺さった。何故か早くも依頼者を怒らせたらしい。
「す、すみません、おれそんなつもりじゃなくて……」
これまで瀞は、人間関係でそう苦労したことがない。親の顔色を窺うのも上手く、空気も読める方だ。それはずっと一歩、喧騒から身を引く孤独でもあったが、代わりに誰かを怒らせることもそうそうなかった。なので新鮮な状況に言葉が出ずに震え上がった。

　明来は平静な顔のまま、瀞を見ずに冷静な運転を続けながら尚も言った。
「つもりでなければ失言が許されるんですか。それは仕事失格ではないんですか」
　びくっとしつつ、とにかく何か答えなければと焦る。後から思えば自分でもまずいとわかる反応を返してしまった。
「いやでも、おれは研修中で給料は出てなくって.....」
「そんな事情は客には関係ありません。むしろ言い訳が素人らしくて見苦しいです」
　明来が機嫌を損ねたように、今までよりも急なブレーキを踏んだ。これはやばい、そう思いながらも、最早完全に瀞は動揺してしまった。
「いやでも、それならおれをよこした烙鍍に言ってください.....」
　本来怒られるべきはサボリの烙鍍だろう。辛うじて思い止まったものの、瀞が家を出た時もただ寝ていただけなのを伝えたくなった。

　ところがそこから明来の反論は、思わぬ方向へ飛び火したのだった。
「烙鍍君からは、うちの見習いに現実を教えてやってくれと言われてます」
　は!?　とうめき声を飲んだ。明来の口が笑っていることに気付き、運転席を凝視して叫ぶしかない。
「意味わかんないですし！　　じゃあわざわざ明来さんに絡ませるためにここに来させた!?」
「そもそもがそういう依頼ですから。私のクレームを烙鍍君は快く受け止めてくれます」
　何故そんな依頼者を常連に持つのか、烙鍍の神経を心から疑った。動揺する瀞を見て明らかに愉しんでいる明来には、もう反感しか湧かなかった。
「それ正直、人間的にどうかと思いますけど！　　水商売で絡まれる時はもっと高給もらえますし！」
　何故か明来は、とても楽しそうに瀞に反駁してくる。
「性格ブスと言いたいんですか。そんなの過去に何度も言われましたよ、お前が恋愛できないのはブスを言い訳にして努力しないからとか、ズバズバ言う性格だからとか、もう聞き飽きました」
　そんなことを楽しげに言う笑顔に不意に胸が重くなった。怒りの勢いが一気に落ちて、フロントガラスに視線を戻す。
「い、いえ、それは.....おれは、そうは思わな.....」
「そうなんですか。じゃあ私と付き合ってくれるんですか？」
「いやそれは、おれすでに彼女いますから！」
　何故こうも極端な話になるのか。完全にからかわれていると自覚する。
「ほら、偽善者。今まで優しい言葉をかけてくれた人はみんなそうでした」
「っても、そんなん言われたらもう何も喋れないじゃないですか！」

　そこでぎゅ、っとまたも強めのブレーキの反動が瀞を襲った。
　え!?　と前を見ると、何故か瀞の下宿するマンションのすぐ間近だった。

　驚く間もなく、助手席のドアが唐突に開けられる。
「お迎えありがと、明来サン。はい、これで今日はお役御免、見習いクン」
　最悪だ。と思う間もなく、さぼっていたのを隠そうともしない烙鍍が、瀞を助手席から引っこ抜いた。その後は挨拶一つなく、明来の車は走り去ってしまったのだった。

　呆然と車を見送っていたら、少し前から瀞の内に潜む天使という謎意識が憐れみの声をかけてきていた。
――こりゃ、シヅキの完敗だね。お疲れ。
「――って！　見てたならもっと早くフォローくれよ、紫音（しおん）！」
――むりむり。オレもあの人好きじゃないし、人生経験値がまるで違うよ。
「ってめっちゃ了見狭いのに!?　ブスだから恋愛できないとかさ！」
　内なる紫音はオレ口調のくせ、烙鍍のオンナという謎の自称天使だ。都会に出てすぐこの天使に憑かれたため、瀞は烙鍍達の家に居候することになった。
　だから瀞がずっと秘密にしてきたことも、瀞の体に棲む紫音は知っている。
――シヅキがそれを言う？　お前は自分がこの体だから、恋愛できないとは思ったことはないの？　この顔だから恋愛できない、とは何が違うの？

　痛いところをつかれて唸る。同じ体に棲む紫音は瀞の記憶まで見れるわけではないが、感情反応の一部は共有しているらしい。
　瀞は憮然と、マンションに戻ってエレベターのボタンを押したところで、ようやく紫音に返答していた。
「いや、だって……おれのは病気だし……」
　今日は図らずも、明来を騙すことになってしまった。「男性限定」という依頼に瀞が行くことからして間違いだった。
　つい先日に文漓という彼女ができるまで、瀞は誰にも自分の秘密を言えたことがなかった。生まれた時から瀞の心は男らしくあることを望み、それは瀞が生まれた体とは明らかにずれている在り方だった。

――本当は、女の子？

　高校までは自身を抑え、親にも悟られずに瀞は女性として生きた。家を出たのもＩＴ系の専門学校に通うのも、いずれは在宅で起業し、ひっそり男性として生きるためだ。その生き辛さを初めて見抜き、受け入れて微笑んでくれた文漓に、瀞が惚れないわけはなかった。
　そこから何故か、文漓の双子である烙鍍のオンナ、紫音に見込まれてとり憑かれた。それでもそれで文漓の家に転がり込むことができたので、謎の霊との共生も慣れてきた頃だった。

――容姿も性別も、望んでなるもんじゃないでしょ。お前はもしカザリと出会えなかったら、この体だから恋愛できない、そう思わなかったって言える？
　時に誰より鋭い紫音に何も言い返せなかった。しょぼくれてマンションのドアを開けると、お帰り、とうっすら微笑む文漓が、温かい紅茶を用意して待っていてくれたのだった。

　１ＬＤＫの文漓のマンションで、居候の瀞は烙鍍と共にリビングで生活している。
　文漓の部屋は何人たりとも立ち入り禁止で、何か話がある時は台所か、単身用マンションにしては広いバルコニーで憩いの時間を過ごしていた。
　カフェセットの上の、文漓が淹れてくれたお茶と小さなクッキーをつまんでいると、先刻のストレスが吹き飛んでいく。
「ありがとな、文漓。心配してくれたんだ」
「大丈夫だよ。金井さんは烙鍍のことでも、毎回ボスにクレームの電話をしてるから」
「……ここのボス、図太いんだな」
　「ツキモノ」の仕事を集めて来るのは、瀞もまだ会ったことのない謎の上司だ。その中から何の仕事を選ぶかは自己責任となっている。
「おれ、今後の仕事選ぶの、本当慎重にしよう……」
　見習い中からこのザマではとても情けない。ふう、と溜息をついた瀞に、蜜柑色のリボンが揺れる黒髪ツインテールで、文漓が猫のように首を傾げた。
「でも茨月くん……悪いと思ってるよね？」
「それは……一応、仕事として行ったんだし」
　うんざりした顔しか見せていないのに、文漓のこうした眼力を瀞は凄いと思う。瀞が身体上は女性だと見抜いたのも、おそらくその観察眼故だろう。同じ専門学校の勉強も瀞より呑み込みが早く、相当頭が良いはずだった。
　明来は皮肉そうにずっと笑っていたが、嫌われて当然そうなやり方でしか話せないのか、それとも瀞の対応が悪かったことの反映なのか――後者なら瀞の不心得だ。バイト三昧だった高校生活でも理不尽な相手は勿論いたが、瀞が悪い場合も当然あった。
　今日は動揺しかできなかった。明来が今後クレームをつけてきても、烙鍍の自業自得なのでどうでもいいが、瀞個人として明来に謝りたいと思った。

　文漓にきいてみると、じゃ、烙鍍に言っておくね、と笑ってくれた。掴み所のない烙鍍と話していると、いつも瀞がやり込められるからだ。烙鍍は基本文漓に弱く、文漓は瀞に甘く、じゃんけんの関係が三人にはある。
　文漓は瀞以外の前では滅多に笑わない。その微笑みだけで九割方癒された瀞は、明日もう一度明来に会う前に、ひたすら脳内謝罪シミュレーションを繰り返したのだった。

翌日の昼前に。またも烙鍍を迎えにきた明来の所へ、先に瀞が出向いて「昨日のことを謝りたい」と言うと、窓越しの明来はにやりと歯を剥いて笑った。
「やっぱり偽善者ですね。自分の罪悪感を払拭するために謝って気持ちよくなって、悪者役にもなってくれないんですか」
め……めんどくせー!!　改めて慄(おのの)いている間にも明来の舌鋒が火を噴く。
「口先だけの謝罪、貴男みたいなイケメンはそれで許される場面も多かったんでしょうけど、たまには世間の辛酸もなめてください」

背骨がよろけてボンネットによりかかった。エンジンが切られたばかりの車体が熱い。瀞はまだ運転免許も持っていない。思わず昨日から感じていた本音を言ってしまった。
「それ……明来さんみたいな強者が、そういうこと言いますか……」
「？」
「毎月五万出せて車にも乗れる経済力あって、おれみたいな弱小バイトいじめて楽しいですか。悪者役、なれるものならおれだってなりたいです！」
「なるほど、ブスだけどお金があるのは強いという話ですか。それはさぞ幸せなことでしょうね、ブスでも金の力で人を買える」

がくっと項垂れた。何を言っても明来の方が上手だ。絶句していたらオートロックのドアを開けて烙鍍がやってきた。何処にでもある普通自動車にかじりつく瀞を見つめる。色の薄い目が細められた瞬間、堰を切ったように大笑いを始めた。
「――そういうところ、いい、明来サン」
どうやら瀞でなく、明来に笑っているらしい。客に対して何と失礼な、という話だが、明来は明来で何故か耳を赤く染める。そのまま僅かにはにかんでしまった。
「すごく面白い。やっぱり明来サンの仕事、いい」

意味わかんねぇ。車上に肘をついたまま烙鍍を凝視するも、子供のような笑顔は冗談には見えない。おそらくそうでもなければ、こんなややこしい依頼者の仕事を常連で受けないだろう。
ふっと、明来の視線が烙鍍から瀞に流されてきた。
「別にね、茨月さんのような正直な人は悪くはないですよ」

「……え？」
「でもどうせ、茨月さんは私の依頼を受けてはくれないでしょう。ブスだし面倒くさいし煩いし。烙鍍君は嘘でも、好きで私の依頼を選んで受けてるって、プロ根性を見せて言ってくれるんですから」

　昨日より穏やかな声で言う明来に、隣から全く不誠実な声がかかる。
「あー、まだそんなこと言ってるんだ、明来サン。俺こう見えても、引く手数多なんだけどな？」
　それ自体は嘘ではない。明来のような依頼は意外に多い。その中から烙鍍が明来の依頼を、優先的に受けているのは確かだった。
　依頼料も最低金額の五万円だ。利点は平日の日中に付き合うだけでいいことで、空いた時間で他の仕事を受けることもできるが、烙鍍はそこまで仕事熱心ではない。

　何故烙鍍は、あえて明来の依頼を選ぶのだろう。理由は知らないが、それ自体が明来を喜ばせているのは明らかだった。
「烙鍍君はいかにも楽をしたいのが見え見えで腹が立ちます。今度から土日も呼び出す条件にしましょうか、勿論残業代は払いません」
「あー、別にいいけど、『車内同伴』が根本だから明来サンも外に出ないといけなくなるよ？　せっかくのお休みなのに」
　要領のいい返答に明来は痛く不満そうだ。烙鍍の仕事ぶりが良いとは思っていないが、担当者を変えろとは言わない。烙鍍が明来の依頼を選ぶ限りは明来も烙鍍を同伴するのだ。

　何もわからないまま、明来の車は烙鍍を連れて行ってしまった。
　道路に立ち尽くしていると、見かねたのか内なる天使が再び話しかけてきた。
――最初もそうだったよ、アキさん。とにかく文句ばかり言うんだけど、顔はめっちゃ笑顔で舞い上がってた。
「す……素直じゃなさ過ぎ、それ……」
――ラクトはそういうの、わかるからねぇ。ラクト自体、自分の存在を一番喜んでくれるところで仕事したいんだよ。アキさんみたいな人の依頼は、ラクトみたいな物好きでないと受けないことはアキさんもわかってるよ。
　結局そういうことなのだろう。でなければ一回五万円の依頼は続かない。

――きっとアキさん、シヅキが謝って喜んでるよ。いじめてやったのに尊重してくれたって。
「信じらんねー！　だからそれが、めんどくせーって!!」

明来の微笑みは歪んでいる。それでもまがりなりにも喜んでいるなら、「やっぱり偽善者ですね」などと相手に言うだろうか。ブスでも美人でも嫌われるだろう。そんなことすらわからないのだろうか。

ひねくれものにしか見えない明来でも、依頼者として烙鍍に選ばれるだけで喜んでいる。誰かに選ばれるのはそれだけ心地良いのだ。その快適な椅子が欲しいなら嫌われる行動はとらず、選ばれる理由を磨くのが常人(つねびと)だろう。恋愛も仕事も友情もそうだ。人間はきっと選ばれるための努力に人生の多くが費やされる。

しかし「天使」を自称する紫音は、薄い雲の向こうから人間世界を覗いているようだった。

――選ばれる努力があるなら、選ばれない努力もあるんじゃないの。シヅキが男の恰好をするのは、男から言い寄られないためでもないっけ？

「それは.....いや.....」

――アキさんは努力してるよ。次は選ばれない不安を堪えてクレーム出すし、対価を上げるとか条件改善もしない。それで文句言うシヅキみたいな奴が、依頼を受けることを防いでるんじゃない？

ぐぐぐ。紫音の切り込みにはこうして口を塞がれてしまう。

文漓の観察力が目に見える結果に向かう「明」なら、紫音の鋭さは現在進行形の「暗」だ。紫音は人の言葉や態度の奥行きをよくみている。だから気ままな「烙鍍のオンナ」なんてやれるのだろう。瀞や明来への言葉は辛辣だが、声には何の苦味もなかった。

――ブスでクレーマーで最低金額だけど選んでくれって。シヅキはこれと同じこと、何度も依頼できる？

やっと瀞は、紫音の言わんとすることがわかった気がした。

「要するに.....ありのままを受け入れろって依頼してるわけ？」

そんな無茶な。大抵の常識人ならそう思うだろう。何であれ己の現状では選ばれない現実を明来も思い知ってきたはずだ。

――ブスだから無理。体が女だから無理。そういうの、シヅキは嫌いじゃないの？

「それは.....うん」

男性として生きたかった瀞。たった一人で都会に出たのは、その望みで誰も傷付けないためだ。両親に罪はないのだから、願わくば隠し通したい。

男性として生きたいことに理由はない。ただそうだっただけだ。

その等身大の瀞に微笑んでくれたから文漓に惚れた。それは無茶な依頼をよこす明来と本質は大差なく、明来は単に率直なのだ。偽善者と言われた意味が少しわかった気がした。

「.....そう言えば、紫音は何で、とり憑く相手におれを選んだのさ？」

部屋に帰る直前に前々からの疑問を口に出した。しかし紫音がまっすぐ答えないこともわかっていた。
――えー。だってお前、オレと同じで、おれっ娘でカワイイじゃん？
嘘吐け。「可愛い」という感情はどうやら本当だと感じたが、紫音だけでなく文漓も烙鍍も、瀞から見ればまだまだ秘密が多いのだった。

烙鍍が帰ってから、明来は瀞の謝罪に喜んでいたと改めて聞いた。
そもそも営業職である明来は、穏健な態度もとれるし媚びも売れる。ところが気に入った相手には素直になれず、あんな態度になってしまうらしい。
それに対して醜態を晒した瀞を、明来は正直だと言った。その時の顔は鼠をくわえた猫のようで、それだけは悪くない仕事だった。今ではざわざわと胸の奥の猫じゃらしが燃えるくらいに。
次の新月から瀞も「ツキモノ」として独り立ちする。初仕事はいっそ、烙鍍から明来の依頼を奪ってやろうか。何故その依頼を選んだか訊かれたら、爽やかに応えてやりたかった。
――あなたがブスだから。

-了-

オマケ：わたしのお父さん

「ラッキースケベ」という言葉がある。同居ものの物語ではお約束の、入浴や着替えの際にばったり出くわしてしまう事故だ。
彼女側の謎の事情で、来年二月までの期間限定ではあるのだが、文漓(カザリ)は瀞(せい)の初の彼女だ。下宿に居候を始めてから、それを全く期待しなかったといえば嘘になる。

しかし文漓の双子である烙鍍(らくと)が言うように、彼らの同居生活にピンクの色は皆無だった。
「文漓は死火山並にガード固いよ。だからガツガツしてないあんたがいいんじゃない？」
自室の鍵だけでなく、トイレと洗面所がある浴場まで、文漓の使用中はがっちり扉が閉ざされている。どちらの鍵も、文漓が自作してまで取り付けたものだと烙鍍は語る。
パジャマ姿すらほとんど見たことがない。二月には帰るという実家で、婚約者に近い相手もいるらしいのだから、彼女の貞操観念はきっと古風でかぐわしい。
素晴らしいのだが、これでは瀞は友達とどう違うのだろう。それどころか現状はほとんどヒモに近い。

居候を始めて二カ月がたち、専門学校も夏休みに入った。しかし瀞は「ツキモノ」仕事を二回目にしてしくじり、二週間働いたのに一文も入らず、身中の同居人紫音(しおん)に慰められる羽目になっていた。

――仕方ないよ、最初から一回ぽっきりでタダ働きさせる気の客もいるからね。なるべく前金制と身分証明と面談と紹介者の情報で、ボスも防ごうとはするんだけどね。

本来ならその面談は勘の良い烙鍍が度々担当し、依頼者の人間性を観る役目を仰せつかるとのことだ。今回は依頼者が遠方かつ直前の申し込みだったため、十分な査定ができず、誰もが怪しいと思っていた親戚の介護依頼を見事に瀞が選んでしまったのだ。
「自己責任とはいえ.....せっかくの夏休み、文漓と初デートに行ける予算もない.....」
それでなくとも家賃と食費を世話になっているのに、瀞の自尊心は最早風前の灯火だった。

身体上の性別だけで言えば女同士である瀞と文漓は、文漓のガードが固いなら、男役の瀞が動かなければ仲が進展しない。それには瀞の方に自信、もしくは強い性欲が要る。
「別におれも、そんなにイチャイチャしたいわけじゃないし……キレイな女の人とかグラビアは好きだけど、憧れるのは夜景を見たり手を繋いだりだし」
周りからは瀞は、良くて声が高いチャラ男にしか見えないだろう。筋トレ以外に手を入れず、肩幅も狭い女の体に服装以上の男らしさは難しい。

ぐでっと一人、居候のリビングのソファで俯せにへこたれる。何故こんな相談を紫音にしているのだろう、と冷静に考える瀞もいる。

――んで、シヅキはそのデート費用を自分で何とかしたいと。じゃないと声かけられないって、シヅキもたいがい古風だねぇ。
「だって……だって……かっこ悪い……」

今回しくじった件も、周りが心配する中、ハイリスクハイリターンと我を通した結果がこれだ。他に気乗りする依頼がなかったのもあるが、新人なのに強がり過ぎた。
お盆前の夕暮れ時、烙人はいつものように放蕩していて、文漓も買い物に出かけているので瀞は一人だ。今回の仕事について、文漓には「いやぁ、世間勉強になった！」と今でも意地を張っている。失敗した上、こんな風に嘆く姿を見せて情けないと思われたくない。

――いやさ。そこで呆れるカザリなら、そもそもシヅキと同居してなくない？

紫音の言うことは薄々わかっている。瀞は元々、かっこいいとは思われていないだろう。だからこそ文漓のイメージを更新したいのだ。
「とりあえず急いで短期バイト入れたけど、どれも全部盆明けだし……言ってる間に次のツキモノが来るし、時間って早過ぎる……」
二週間働いて二週間休むツキモノ仕事。休みの二週間も働くにはもっと実績が必要らしい。世の中は何処もそうして厳しい。

うだうだ愚痴っている内に文漓が帰ってきた。途端に姿勢を正す瀞に紫音が呆れていた。

旅行しよう。と文漓が言い出したダイニングで、エプロンを外しながら瀞は目を瞠(みは)った。
「茨月(しづき)くん、お盆は時間ある？」
短期バイトが全て盆明けで本当に良かった。焦りながら全身全霊で頷くと、嬉しそうに文漓が瀞の作ったカレーをスプーンで口に運ぶ。
ダイニングというには少々手狭な台所で、省スペースの黒いカウンターテーブルには大体二人しか座れない。烙鍍は滅多に自宅で食事をとらないため、ご飯時はいつも文漓との貴重な時間だった。

「私の学費を出してくれるお父さんに会いに行くの。日帰りできる近い所だけど、切符を送ってくれて、泊まるのも大丈夫だって」
「え？　それって文漓の実家？」
ううん。と、殊更にキレイな笑顔で文漓が首を振った。
「わたし、お父さん、二人いるから」
それ以上は語らないので、聞いてはまずい領域と見えた。世の中には色んな家庭があるものだろう。
「後ね、ボスが茨月くんに会いたいんだって。親戚付き合いは嫌だけど、茨月くんに会えるなら来てくれるって言ってた」

どうやら行き先は「ツキモノ」創業者の関係らしい。そうなるとこれは彼女の父親にご挨拶という驚きの企画ではなく、瀞の適性について直々に査定されるのではないだろうか。
思わず息を呑んだ瀞に、文漓がサラダを取りつつ、今度は緩んだ顔でふふっと笑った。
「緊張しなくても大丈夫だよ。ボスは多分、茨月くんの中の紫音に会いたいだけだから」
「……へ？」
「それでなくても茨月くんは、紫音のツキモノとしてずっと仕事してくれてるんだから。あまり無理せずに、たまにはゆっくりしようよ」

稔(うつぎ)文漓は天使だろうか。カレー、美味しいと幸せそうにしてくれる彼女に、瀞はじんと来ながら複雑だった。
家賃と食費の負担は文漓にとって、瀞が紫音をとり憑かせていることの報酬なのか。今更ながら瀞には意外な真実だった。

「文漓と紫音って……そういえばどんな関係？」
思わずきいてしまったことに、身の内で紫音が目を覚ました。普段はほとんど眠っているのに、何故ここで反応するのだろう。

文漓も何処となく困ったような笑顔で、さらさらと不可解なことを答えた。
「紫音は私が高校の頃から、見守ってくれてる天使だよ。言ったことなかったっけ？」

烙鍍のそばにいたいがために、紫音は人間の体が欲しい、と初めて出会った時に言った。だから現在、紫音は瀞の中にいる状態なのだ。
しかし何故、そこで文漓のことまで見守っているのか。今も瀞の心臓の鼓動を早め、紫音が密かに焦っているのはどうしたことなのだろう。
「烙鍍のオンナだから、双子の文漓も紫音は可愛がってるってこと？」
「そうじゃないかな。私も紫音、大好き」
紫音が天使という奇妙な存在である以外、変なところはないはずの会話。これ以上踏み込むのはダメだ、と本能的に瀞は感じていた。
月光の天使。瀞の体を時々動かし、烙鍍に甘える以外何もしていない不可思議な紫音の肩書を、今更のように瀞は思い出した。
「それじゃ、烙鍍と紫音のなれそめとかは？　何で紫音は烙鍍みたいなたらしがいいの？」
「あははは、それは紫音に直接きいて。多分教えないと思うけどね」
「やっぱり……オレ口調なとことかも含めて、紫音が一番謎なんだよな。人間には天使とか理解できないんだろうな」
ようやく空気が和んだので、この家の住人について詮索するのはやめにする。心なしか紫音の気配もほっとしているようだった。

とりあえず、と。文漓が部屋に帰ってから、瀞はリビングでがっしり両手を握った。
「何であれ初デート……絶対成功させる！」
文漓から誘わせたのは情けなかったが、彼女との初旅行、嬉しくないわけがない。瀞にできることは何か、必死に頭を巡らせるのだった。

瀞と文漓の初デート先。それは「橘診療所」という、一風変わった開業医院だった。
新幹線ならあっという間の距離で、市街地から少し離れた小丘の高級住宅街。そこに構える「玖堂(くどう)家」という、大きな屋敷の一画にその医院はあった。
「すっげー……文漓のお父さん、こんなにもお金持ちっぽい所の人だったんだ」
「あくまで雇われ院長だけど。私も高校の時はこっちにいて、今と同じようなマンションに住ませてもらってたよ」
その頃は生活費も玖堂家の援助があったという。瀞も実家は開業医でわりと太いのだが、反対を押し切って独断で家を出たので援助は期待できない。
文漓も専門学校からは学費の援助だけになったというが、全部自分で頑張ってきた茨月くんは偉いね。と笑ってくれるのが、苦学生の瀞には何とか自尊心の砦だった。

交通費も宿泊所もお膳立てされた初旅行で、瀞に先立つ物がない以上、お出かけを快適にするのは気遣いしかない。
山紫陽花(やまあじさい)のように華奢な文漓の荷物をほとんど引き受け、手作りのお弁当と取って置きの紅茶の水筒を持ってきた瀞に、短い車中で文漓はとても喜んでくれた。
「おしぼりもいい匂いがするし、茨月くんは、いいお嫁さんになるね」
「それ、嬉しくないし……文漓、わかってて言ってるよな？」
二人きりの旅行かと思ったが、烙鍍は一足先に行っているだけらしい。泊まる部屋は瀞と烙鍍が一緒だと言われ、そこはひたすら残念だった。
訪ねるのは橘診療所で、泊まるのは本邸の玖堂家の客室。なまじっかなホテルよりずっと快適そうで豪華な部屋に瀞は恐れ入る。
案内された客室に荷物を置くと、すぐに文漓が迎えに来た。文漓が「お父さん」に会っている間、瀞は「ツキモノ」のボスに会えということだった。
「おれ、文漓のお父さんに挨拶しなくていいの？」
「いいの。私、お父さんなんていると思えないもの」
「え？」
わたし、お父さん、二人いるから。
瀞をこの遠出に誘った時、行き先は実家ではないと言った文漓の家庭事情が、思うよりややこしそうなのはわかった。
それにしてもあっさりしている。あくまで切符を送られ、義務だから来たと言わんばかりの涼しい笑顔で、手を振って背中を向けた途端に冷たい無表情になった文漓だった。
瀞の前だと笑っているので忘れていたが、棯文漓はそう言えば常に無愛想だった。専門学校はおろか、烙鍍や紫音の前ですらも。

文漓に連れて来られた中庭では、手入れはキレイだが古びた遊具が数点ある。その内の一つ、今時珍しい鎖のブランコで、何処か異様な光景が展開していた。
「あ、あの……貴方がボスの、零(れい)さんですよね？」
「……」
二つのブランコの左側に、癖毛のショートで黒髪の、夜の薊(アザミ)の如き静かな美女が微動だにせず座っている。
スーツ姿で膝の上には真っ白なウサギのぬいぐるみがあり、瀞の到着を待っていたのはわかるが、文漓以上の険しい無表情に瀞は尻込みしそうになった。美人の無表情は大体怒っているように見えるのだ。
そんな瀞の恐れを感じたか、紫音が半ば、強引に体の主導権を奪って動き出した。
「わーい、久しぶり、レイ！　元気してた？　まさか橘診療所に顔を出すなんて、いったいどんな風の吹き回し？」
美女の厳しい顔付きが僅かにだけ緩んだ。よく思うことだが、紫音は緊張感や人見知りが乏しいせいか、相手をする者も自然とほぐれていく場合が多い。
それはともかく、そこにいる美女は瀞の雇い主で、ツキモノ創業者の春日(かすが)零のはずだ。

玖堂家は彼女の出資者でもあるという。
　零が強面に似合わないぬいぐるみを狭い肩に乗せる。どうやってバランスを取っているのか、ブランコから立ち上がっても落ちる様子が全くなかった。
「……驚いたな。見事な月属性だ、紫音」
　そして開口一番、無遠慮に人外事項らしきことを口にする。これが雇い主でなければ、日本では正気を疑われかねない率直さだ。
「でしょでしょー。オレもシヅキを見つけた時にはビックリしたよ！」
「あまりここの悪魔達に関わらせるなよ。お前に体を使わせるようなバカ、あっさり魂を持っていかれる」

　悪魔だの魂だの、トンデモ話が当然の如く出ている上に、瀞はどうやら爽快に貶されている。零がおそらく普通の人間でなく、また正直者なのはそれでわかった。
　気分が良いわけはない。しかも相手は雇い主だ。迂闊なことを言えばクビの恐れがあるにも関わらず、どうしても瀞はききたいことができてしまい、紫音から体を取り戻した。
「あ、あのっ！　月属性って何なんです？」
「……」
「おれ、ただの人間なんですけど！　そうじゃないと思われてるならご期待に添えないというか、何にもできなくて申し訳ないというか、ただの貧乏学生というか、えっと……」
　言いながら、不意に、思わず涙が込み上げそうになった。げっ、かっこ悪い！　と慌てて歯を食い縛り、気持ちを立て直す。
　先日瀞はツキモノの仕事を失敗した。それを責めることはなく、わけのわからない話を無防備にする二人に、不覚にも安心したらしい。

　仕事を失敗したので今の瀞には本当にお金がない。ここに来て雇い主に会うという話になった時、必ず何か苦言があると思っていた。
　零はモデルのように高い背で瀞を見下ろす。その顔は何処か、無表情でもぽかんとしているようだった。
「……だから、そういう奴のことだ。オマエみたいに、自分がない奴のことを月と呼ぶ」
「――え？」
　話題は仕事の失敗の件には変わらなかった。瀞が発した問いをそのまま受け止め、零は毒気のない声で坦々と返す。
「オマエ、何で紫音に憑かれてるんだ。普通人間はそんなに簡単に誰かに侵蝕されない。紫音は紫音で、女のつもりでもオレ口調が抜けない。誰を光にするかで己が変わるのが月属性だ」
　声色は優しくすらあった。それでも瀞は息を呑んで零の暗い色の目を見る。
　この言葉は嘘でないと、それだけはわかる。それほど零という相手の視線には澱みがない。

　だから瀞は、零が雇い主であることも忘れ、思わず食ってかかっていた。
「自分がないって、どーいうことなんですか。おれ、確かに紫音は嫌いにはなれないけど、好きで同居させたわけじゃないです」
「……」
「おれは自分の意志で生きてきたし、だから家を出てツキモノも雇ってもらったんです。そんな廃人みたく言われる筋合いはないです」
　確かに瀞は日頃、周囲の顔色を窺いながら、自分は男と感じているのを隠して生きてきた。両親にも女の子として接し続けるつもりだ。
　でもずっとその運命を打開するために頑張ってきた。誰も大きく傷付けずに、自分の望みも叶えるためにここにいる、その姿だけは無視されたくない。
「ふうん。で、オマエはどうして、わざわざ独力で都会に出たんだ？」
「それは――履歴書の時点でご存じでしょうけど、男として生きたいからです」
「ふうん。どうして、男として生きたい？」
「それは、そう思うから、で……その方が、おれはかっこいいって思ったからです」
　生まれた時から瀞は強くなりたかった。「かっこいい」ことが至上だと憧れていた。
「じゃあ何故、かっこいいのがいいんだ？」
「って、だから……そう……思うから……」
　瀞をまっすぐ見つめる零の姿に嘘はない。純粋に、瀞という人間の願いの根本を問うている。それに今さら瀞は戦慄していた。
　零の言う通り、瀞の願いは全て、「そう思う」以外の理由が思い浮かばない。今まで疑問を持ったことはなかったが、生まれつきの一言だけで、本当に説明できるものだろうか。

　言葉に詰まった瀞の前で、零が何故か突然話題を変えた。
「……なあ。この世は、金だよな」
「――は？」
「私にとって、金は自由への切符だ。誰にも縛られたくないからツキモノも起業した」
　は、はあ……。唖然とする瀞の前で、零は少しだけ不敵に口元を上げた。
「じゃあ私は、何故そんなに自由が欲しいんだろうな。私も細かい理由はわからないんだ。多分私も、オマエと同じ月属性だから」
　そこで身中の紫音が、零は誰より生粋の朔夜（新月）じゃん。と言う声が、瀞にはよく聞こえた。
「オマエの言う通り、月には本当は己が在る。でも借りてきた光以外は荒野だ。自由を手に入れて、かっこよさを望んで、私やオマエはこれから何処に向かう？」

　かつて瀞も、月明かりなんて幻だと思っていた。その美しさで人に愛でられる以外に、月光に何の効用があるというのだろうか。

「せめて紫音に学ぶといい。紫音は月でも月光だからな。その下の虹にも光はあるだろ」
　そこまで言うと、零はくるりと振り返り、ぬいぐるみを肩に乗せたまま門の方に去ってしまった。かっこいいのにあのぬいぐるみは何だろうと、最後まできけなかった瀞だった。

　零が行ってしまうと、紫音が喋り出した。
――やったじゃん、シヅキ。レイは嘘吐きが嫌いだから、シヅキは気に入られたよ。
「そ、そうなの？　　ひとまずクビはない？」
　この世は金だよな。そう言った雇い主に、瀞が本当に良しとされたのかは重大だった。
　瀞だってお金はかっこよさの次に大事だ。それは男として生きる自由のためといえば、零の言うことは大体呑み込める気がした。

　ちょうど、橘診療所訪問が終わったらしい文漓が瀞を迎えに来た。瀞と目が合った途端無表情から笑顔になった文漓に、おれの光はこれだよな、そう思わずにはいられなかった。
「ボス、優しかったでしょ？　　茨月くん」
「.....うん。紫音を見習えって言われた」
　へ？　　と、目を丸くする文漓が可愛い。今日も片側だけ長い前髪で半ばは隠されているが。
　紫音は誰を映した月光なのだろう。何故かそれは、烙鍍ではないと思えてならなかった。

　玖堂家の客室では、烙鍍はいつもと段違いに紳士だった。文漓と三人で翌日に新幹線に乗り、家に帰るまでほとんど喋らなかった。
「文漓は結局、診療所で何の話をしてきたんだ？」
「うん。まだこっちにしばらくいるのかって。茨月くんもあれから呼び出されてたけど、何の話をされてたの？」
　瀞としては、仮にも「お父さん」なら呼ばれて当然と思ったのだが、文漓には意外であるようだった。

　黒い髪で黒い眼の、黒いオペ着に白衣を羽織る、自意識過剰そうな黒ずくめの医者。医者なのに煙草をぷかぷかふかす男と、漫画の置かれる外来室で話していたのはほとんど紫音だ。
　家に帰って早速昼食にパスタを作る瀞は、卵とチーズを混ぜながら適当に答えた。

「ああ。何か相談があればいつでも来いって。無愛想だけど優しいな、文漓のお父さん」
　文漓が話したのかもしれないが、瀞が女と医者には見抜かれていた。現実的にも、年をとるほど男装は難しくなるかもしれない。
　そのため話が下手に盛り上がり、ホルモン治療がどうのこうのと、どれも気が進まないものではあったが新鮮な時間だった。

　瀞の親は小児科医で、性同一性障害などの話は小さい頃から小耳に挟んだことがある。それならカミングアウトしていいんじゃないか、と軽く言われたが、田舎を舐めないで下さい。と瀞も軽く返してやった。
「良かった。もうすっかり元気そうだね、茨月くん」
「――え？」
　隣のリビングで烙鍍が昼寝する横で、文漓はくるくるとフォークでパスタを巻きながら瀞を見ずに笑う。
「茨月くんのご飯は何でも美味しいね。私、茨月くんがうちに来てくれて本当に幸せ」
　合わない目線。言葉通りではないと瀞は直感する。文漓の優しさが言わせた慰めだろう。
　これから少し短期バイトに精を出した後、瀞はツキモノ三回目の仕事をすることになる。いきなり一人で現場に叩き込まれるこの便利屋は存外にシビアで、零が旧来の従業員達に慕われているから成り立っているが、新人はすぐにやめることが多いのだという。
「……ありがと。そう言ってくれると、ご飯も作り甲斐があるし洗濯も掃除も楽しいよ」
　瀞の前では穏やかに笑っている文漓だが、水面下ではかなり心配していたのだろう。瀞が「ツキモノ」をやめてしまわないか、いつものポーカーフェイスの下で。

「……あ。しまった、その手があったのに」
「？」
　せっかく仮にも「お父さん」と話せたなら、「死火山」文漓の情報を少しでも集めれば良かった。性別の話題をあっさり受け入れられ過ぎて失念していた。
　優しい環境で瀞は果報者だ。それだけに文漓から差す夜明けの光が曇るのが怖い。まずは二人きりで初デートのやり直しだ、と心に決めてみるのだった。

-了-

-INFOMATION-

ご覧下さりありがとうございました。
このお試し版は別作『ツキモノ-白-』からカットしたエピソードの詰め合わせになります。

本編『ツキモノ -白-』
2023.4.6 公開/9.29 暫定表紙版に変更
(https://puboo.jp/book/134788)
※現在挿し絵依頼中のため、完成後に最終版の掲載予定です
→その時には本編・本作共に表紙を変えて最終更新とします

素敵なイラストは天音心陽(あまねこはる)様にお願いしました。
挿し絵も同氏に依頼中なので、良ければ本編最終版もご覧ください。(時期は未定)

2023.9.23　Studio ***46

ツキモノ -白- 序

著　　pierrette***

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社